

令和2年1月25日

## 学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 徐 恵君 学生番号 G6D5032016

〈論文題名〉 「動詞+ツツアル」の用法に関する通時的研究

〈審査委員〉

主査 外国語学部教授 阿久津 智

副査 外国語学部教授 保坂 芳男

副査 慶應義塾大学教授 木村 義之

## I. 論文の主旨

本論文は、「行きつつある」、「増えつつある」などの「動詞+ツツアル」という表現・文法形式について、その使われ方の通時的な変遷、および英語の翻訳表現としての「動詞+ツツアル」の意味・用法の成立過程を、主に文献資料によって探ったものである。本研究では、以下のことを明らかにしている。

「動詞+ツツアル（アリ）」の意味・用法の通時的変遷については、古代（奈良・平安時代）においては、「動作・状態の継続」（例：出で入りするを見つつあるに）を表すのが主な用法であり、近代（明治期）においては、「継続」（例：発揮の時を待ちつつある）が主であるが、ほかに「接近」（例：今帰りつつある）を表す用法なども見られ、現代においては、「接近」（例：人間のクローンを作ることが可能になりつつある）のほうが主となっている。中世・近世の文献には、「動詞+ツツアル」は現れていない。

「動詞+ツツアル」が近代に復活したのは、英語の進行形 *be -ing* の翻訳表現として使われるようになったためであり、新たに「接近」の用法を獲得したことについては、*be -ing* の「近接未来」を表す用法を取り入れたものと考えられる。

近現代語としての「動詞+ツツアル」は、まず、明治初年に英語学習書に *be -ing* の翻訳表現として現れ、その後、明治 20 年代以降に、一般的な表現として使われるようになり、明治 40 年代に普及した。

日本語教科書では、「動詞+ツツアル」は、中級以上のレベルのものに見られるが、扱われていない教科書も多く、また、扱われていても説明は少ない。これは、日本語学習者にとって、「動詞+ツツアル」の習得を難しくしている要因と考えられる。

## II. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

### 第一章 序論

1. 1 研究の背景と目的
1. 2 研究の方法
1. 3 本論文の構成

### 第二章 先行研究とその問題点

2. 1 古代から近世にかけての日本語の「Vツツアル」の先行研究
2. 2 近代における日本語の「Vツツアル」の先行研究
  2. 2. 1 森岡健二（1991、1999）
  2. 2. 2 竹内史郎（2011）
  2. 2. 3 八木下孝雄（2018）

- 2. 3 現代における日本語の「Vツツアル」の先行研究
  - 2. 3. 1 鈴木 (1972)
  - 2. 3. 2 高橋 (1996) による「Vツツアル」の分析
  - 2. 3. 3 森山 (2005) による「Vツツアル」の分析
  - 2. 3. 4 副島 (2007) による「Vツツアル」の分析
  - 2. 3. 5 庵他 (2011) による「Vツツアル」の分析

### 第三章 国語辞典における「Vツツアル」の記述

- 3. 1 2000年～現在までの国語辞典
  - 3. 1. 1 小型辞典
  - 3. 1. 2 中型辞典
  - 3. 1. 3 大型辞典
- 3. 2 1999年までの国語辞典
  - 3. 2. 1 小型辞典
  - 3. 2. 2 中型辞典
  - 3. 2. 3 大型辞典

### 第四章 古代から近代にかけての日本語における「Vツツアル」の用法の分析・考察

- 4. 1 古代から近世にかけての日本語における「Vツツアル」の用法の分析・考察
  - 4. 1. 1 調査の目的
  - 4. 1. 2 調査の対象
  - 4. 1. 3 調査と分析の方法
  - 4. 1. 4 調査の結果
- 4. 2 近代における日本語の「Vツツアル」の用法の分析・考察
  - 4. 2. 1 調査の目的
  - 4. 2. 2 調査の対象と調査の方法
  - 4. 2. 3 本稿における「Vツツアル」の用法の分類基準
  - 4. 2. 4 調査の結果
  - 4. 2. 5 調査の結果の分析と考察
  - 4. 2. 6 調査のまとめ
- 4. 3 まとめ

### 第五章 近代語における「Vツツアル」は翻訳表現であることに関する考察

- 5. 1 調査の目的
- 5. 2 調査の対象
- 5. 3 調査の方法

- 5. 4 調査の結果
  - 5. 4. 1 英学資料における調査結果
  - 5. 4. 2 『明治文学全集』における調査結果
  - 5. 4. 3 明治の新聞における調査結果
- 5. 5 まとめ

## 第六章 明治の英語読本における「Vツツアル」の用法の分析・考察

- 6. 1 英語教科書について
- 6. 2 明治期の英文典における進行形の分類
  - 6. 2. 1 『ピネヲ氏原板英文典直訳』
  - 6. 2. 2 『格賢勃斯英文典直訳』
  - 6. 2. 3 『通俗英文典』
  - 6. 2. 4 まとめ
- 6. 3 明治期の英語読本における進行形「be+Ving」とその日本語訳に関する調査
  - 6. 3. 1 調査目的
  - 6. 3. 2 調査対象
  - 6. 3. 3 調査方法
  - 6. 3. 4 調査結果
  - 6. 3. 5 調査結果のまとめ
- 6. 4 明治の英語読本における進行形「be+Ving」の用法の考察
  - 6. 4. 1 『実用英文典』における進行形「be+Ving」の説明
  - 6. 4. 2 永尾（2011）における進行形「be+Ving」の説明
  - 6. 4. 3 本稿における進行形「be+Ving」の用法の分類
  - 6. 4. 4 明治期の英語読本における進行形「be+Ving」の用法についての考察
- 6. 5 翻訳語としての「Vツツアル」の用法の考察
- 6. 6 英語の進行形「be+Ving」がなぜ「V+ツツアル」と訳されたかについての考察
- 6. 7 英語の進行形「be+Ving」がなぜ「Vテ+アル」と訳されたかについての考察
- 6. 8 まとめ

## 第七章 現代語における「Vツツアル」の用法の分析・考察

- 7. 1 調査1：現代語における「Vツツアル」の用法についての調査
  - 7. 1. 1 調査1の目的
  - 7. 1. 2 調査1の対象と方法
  - 7. 1. 3 本稿における「Vツツアル」の用法の分類基準
  - 7. 1. 4 調査1の結果
  - 7. 1. 5 調査1の結果の分析と考察

- 7. 1. 6 調査1のまとめ
- 7. 2 調査2：学習者は、「Vツツアル」について、どのような用法を使っているか
  - 7. 2. 1 調査2の目的
  - 7. 2. 2 調査2の対象
  - 7. 2. 3 調査2の方法
  - 7. 2. 4 調査2の結果
- 7. 3 調査1と調査2の考察
- 7. 4 調査3：日本の日本語教科書についての調査
  - 7. 4. 1 調査3の目的
  - 7. 4. 2 調査3の対象
  - 7. 4. 3 調査3の方法
  - 7. 4. 4 調査3の結果
- 7. 5 学習者における「Vツツアル」の誤用に関する考察
- 7. 6 まとめ

## 第八章 結論と今後の課題

- 8. 1 調査結果・分析・考察のまとめ
- 8. 2 「Vツツアル」に関する結論
- 8. 3 今後の課題

## 参考引用文献

### 謝辞

### 参考資料

## III. 本論文の概要

### 第一章 序論

第一章では、研究の背景と目的について述べている。

「動詞+ツツアル」（以下「V ツツアル」）は、アスペクトの体系に属する 1 つの形式であるとされるが、「V ツツアル」に関する先行研究は少ない。先行研究によれば、今日使われる「V ツツアル」は、英語の進行形 *be Ving*（*Ving* は動詞の *-ing* の形）からの翻訳表現であるとされるが、本当に翻訳表現であるのか、翻訳表現だとして、どうして翻訳表現として使われるようになったのか、いつごろから使われるようになったのかなど、詳しいことは明確にされていない。

以上のような点を中心に、本論文では、各種コーパスをはじめ、主として文献資料によって、「V ツツアル」の用法を通時的に明らかにすると述べている。

## 第二章 先行研究とその問題点

第二章では、「V ツツアル」に関する主な先行研究を概観している。

古代語、および近代語としての「V ツツアル」の用法に関する研究として、竹内史郎の研究を取り上げ、翻訳表現としての「V ツツアル」に関する研究として、森岡健二や八木下孝雄の研究を取り上げている。また、現代における「V ツツアル」に関する（主にアスペクト形式の1つとして取り上げる）研究についてもふれている。

その上で、詳しい調査・分析はまだ行われていないようだ述べている。

## 第三章 国語辞典における「V ツツアル」の記述

第三章では、現代の国語辞典（24冊）における「V ツツアル」に関する意味記述（見出し語は「ある」、または「つつ」）をまとめている。

国語辞典における語義説明は、ほぼ「動作、作用の進行継続を表す」となっている（「動詞+テイル」と変わらない）と述べている。

## 第四章 古代から近代にかけての日本語における「V ツツアル」の用法の分析・考察

第四章では、まず、『日本語歴史コーパス』（奈良時代編、平安時代編、鎌倉時代編、室町時代編、江戸時代編）を用いて、奈良時代から江戸時代までの「V ツツアル（アリ）」の使用状況、その意味・用法について調査を行い、続いて、『太陽雑誌コーパス』と『日本語歴史コーパス』（明治・大正時代編）を用いて、近代の「V ツツアル（アリ）」の意味・用法について調査を行っている。

その結果、奈良時代には、「動作・状態の継続」という用法のみであったものが、平安時代には、「結果の存続」、「繰り返し」、「動作開始の示唆」などの用法が現れている（各用例における用法の判断は、『新編日本古典文学全集』の現代語訳に基づく）。鎌倉・室町・江戸時代には、用例が見られなくなるが、明治期に入り、再び用例が見られるようになり、そこには「継続」や「接近」を表す用例が現れている（各用例における用法の判断は、金田一春彦や Zeno Vendler による動詞の（アスペクト的意味）分類、井島正博による動作の局面などに基づく）。

この結果は、近代の用法に関しては、先行研究とほぼ一致しており、「接近」の用法については、古代にはなかったものだと述べている。

## 第五章 近代語における「V ツツアル」は翻訳表現であることに関する考察

第五章では、先行研究において「V ツツアル」が翻訳表現だとされていることを確かめるため、幕末から明治初期に作られた英語学習書（英和辞書や英文典）、明治初期～30年代の文学作品（筑摩書房の『明治文学全集』から5冊）、明治期の新聞記事（『聞蔵Ⅱビジュアル』、『ヨミダス歴史館』）を用いて、調査を行っている。

その結果、「V ツツアル」は、まず明治初年の英語学習書に **be Ving** の翻訳表現として使われ（「動詞+テアル」も見られる）、明治 20 年代以降、文学作品や新聞記事に現れるようになり、明治 40 年代に普及してきている。

ここから、「V ツツアル」は、まず明治初期に英語の **be Ving** の翻訳表現として使われ（オランダ語からの翻訳ではない）、その後一般的な表現として使われるようになったことや、近代語の「V ツツアル」は英語の進行形に相当する日本語訳であることが明らかになったと述べている。

## 第六章 明治の英語読本における「V ツツアル」の用法の分析・考察

第六章では、英語の進行形 **be Ving** と「V ツツアル」との関係を明らかにするため、明治期における代表的な舶来の英語読本 3 種と（①*New National 2nd Reader*, ②*Longmans' The Second Reader for Standard II*, ③*Swinton's Primer and Second Reader*）、それらの直訳本各 2 種（①小野田金弥訳と森修一訳、②伊藤良蔵訳と若林謙吉訳、③野田繁治訳と植田栄訳）を用いて、各読本の用例における **be Ving** の用法とその日本語訳とを分析・考察している。

その結果、英語読本の訳本において、「V ツツアル」は、英語の進行形 **be Ving** の訳としてパターン化していたこと（このほかに、過去進行形の訳としての「動詞+ツツアリシ」などもパターン化していた）、**be Ving** のもつ「近接未来」の用法にも「V ツツアル」が使われていること（ただし、**be Ving** の用法としては、「動作・行為の継続」のほうが圧倒的に多い）、などが明らかになったと述べている。また、**be Ving** がなぜ「V ツツアル」と訳されたかについても考察を行っている。

## 第七章 現代語における「V ツツアル」の用法の分析・考察

第七章では、まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて、現代語の書き言葉における「V ツツアル」の用法の調査を行い、続いて、中国の大学における日本語学習者を対象に、日本語学習者における「V ツツアル」の習得状況（誤用）を見るためのアンケート調査（例文を作らせ、その中国語訳を書かせる）を行い、さらに、日本語教科書で「V ツツアル」がどのように扱われているかについての調査を行っている。

その結果、コーパス調査からは、現代語の「V ツツアル」に、「接近」（瞬間動詞などの用法）、「継続」（到達点をもたない継続動詞の用法）、「途中」（到達点をもつ継続動詞の用法）の用法が見られ、これは先行研究と一致すると述べている。一方、アンケート調査（回収数 83）からは、学習者は、「継続」や「接近」を表す「V ツツアル」を「途中」のようにとらえることがある（誤用の可能性がある）ことがわかったと述べている。

また、日本語教科書（127 種）の調査からは、「V ツツアル」の初出は中級以上のレベル（14 種）であり、その説明（5 種）は、ほぼ「書き言葉に使われる。動作や作用がある方向に変化していることを表す」というものであり、その用例（27 例）には、「接近」や「継

続」の用法のものが多。ここから、日本語学習者の誤用の原因は、辞書や教科書の説明の曖昧さにあるのではないかと述べている。

## 第八章 結論と今後の課題

第八章では、全体をまとめている。

「V ツツアル」の用法を通時的に見ると、古代は、「動作・状態の継続」が主であったが、中世・近世には用例が見られず、近代では、「継続」が主であるが、「接近」、「繰り返しの継続」、「結果の状態」なども見られ、現代では、「接近」が主で、「継続」、「途中」なども見られると述べている。

今後の課題として、現代における「V ツツアル」の用法において、「接近」が「継続」より圧倒的に多いことについて、その原因や過程を探りたいと述べている。

以上が本論文の概要である。

## IV. 論文の総合評価

### 論文提出までの経緯

学位申請者は、2016年4月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了に必要な10単位以上を取得、外国語（日本語）検定試験にも合格している。

博士論文完成発表会は、2019年7月27日に実施され、論文は2019年9月30日に受理されている。論文提出時の業績は、学内外の研究会誌における学術論文4本、学会等における口頭発表（博士論文中間発表会を含む）7本、計11本である。

### 論文の審査結果

審査委員による論文審査会を2019年12月12日に行い、審議の結果、全員一致で「合格」とし、続いて、同日、最終試験（口述試験）を実施し、審議の結果、全員一致で「合格」と判定した。

## V. 審査所見

本論文は、「動詞+ツツアル」という表現・文法形式について、その使われ方の通時的な変遷、及び、英語の翻訳表現としての「動詞+ツツアル」の意味・用法の成立過程を、主に文献資料によって探ったものである。

「動詞+ツツアル」に関する研究は、これまで、主に、英語からの翻訳表現の1つとして、あるいは、動詞のアスペクト形式の1つとして研究されてきた。語史的な研究や、意味・用法に関する記述的な研究も多少はあるものの、広く通時的に、その使用状況や、意

味・用法の変遷について分析・考察したものは、これまでほとんどなかったようである。本研究は、『日本語歴史コーパス』、『太陽雑誌コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』などの、全文検索や形態素解析が可能なコーパスのみならず、デジタル化された資料（英文典、英語読本、新聞記事など）や書籍（『明治文学全集』、日本語教科書）など、多彩な文献資料を用いて、地道に広く例文を採取し、その1つ1つについて丁寧に分析を行っていて、「動詞+ツツアル」の通時的変遷の全体像を明らかにするのに有益なものとなっており、この点において、高く評価される。本研究によって、「動詞+ツツアル（アリ）」は、古代に用例が見られるものの、中世・近世には用例が見られなくなり、近代に入り、英語の進行形 *be -ing* の翻訳表現として使われるようになったという点が詳細に確認されている。

このほかに、本研究では、近代に新たに現れた「動詞+ツツアル」の「近接」（例：今帰りつつある）を表す用法は、英語の *be -ing* における「近接未来」を表す用法の翻訳表現として生じたことや、翻訳表現として復活した「動詞+ツツアル」は、一般には明治後期以降に広まったことなどを明らかにしている。また、日本語教育に関連するものとして、日本語教科書における「動詞+ツツアル」の調査や、中国の大学の日本語学習者における「動詞+ツツアル」の習得状況の調査を行っているが、このような調査は、おそらくこれまでなかったのではないかと思われる。これらの点において、本研究は独創性を有し、学界に資するものと思われる。

本研究の問題点としては、用法の分析法にやや難がある点が挙げられる。本研究では、「動詞+ツツアル」の用法の分析に、主として従来のアスペクト（主に「動詞+テイル」）研究の枠組みを用いているが（第四章 4.2、第七章 7.1-7.2 など）、基準が必ずしも明確ではなく（あるいは、やや不統一であり）、わかりにくい部分も見られる。また、個別の用例の用法の認め方に関して、疑問に思われるところも一部あり、個別の用例の分析結果の書き方（第六章 6.3-6.4 など）などもやや冗長である。また、分析対象（とくに第六章 6.3 など）の選択が何を基準に行われたかについても、説明が不十分な点がある。

ほかに、調査・分析に関することとして、「動詞+テアル」や「動詞+テイル」など、英語の *be -ing* に相当する他の表現と「動詞+ツツアル」との関係、これらの表現の使い分けや使われ方の変遷などの調査・分析が行われていない点や（第五章 5.4）、明治以降の「動詞+ツツアル」の定着・普及の過程がたどられていない点なども（今後の課題としているようだが）、やや物足りなさを感じる。今後の研究に期待したい。

審査所見をまとめる。本論文は、「大学院学位論文審査基準」（「博士論文審査基準」）に照らして、①研究テーマ、②先行研究・文献資料・調査などの情報収集、③研究方法、のいずれにおいても、おおむね適切・妥当であり、④論旨もおおむね妥当であると認められる。⑤全体の構成、言語表現については、大きな問題はなく、「論文」としての体裁が整っているものと判断する。⑥論文の内容について、独創性を有すること、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであることは、上に述べたとおりである。また、学位

申請者は、これまでに積極的に国内外の学会・研究会で研究発表を行ってきており、2020年春からは、中国・厦門にある集美大学の講師（日本語）に就任することが内定している。これらのことから、当委員会は、学位申請者には、高等教育機関で自立した教育者・研究者として活躍していく能力及び学識が備わっているものと認める。

## **VI. 審査委員会結論**

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、3委員全員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。